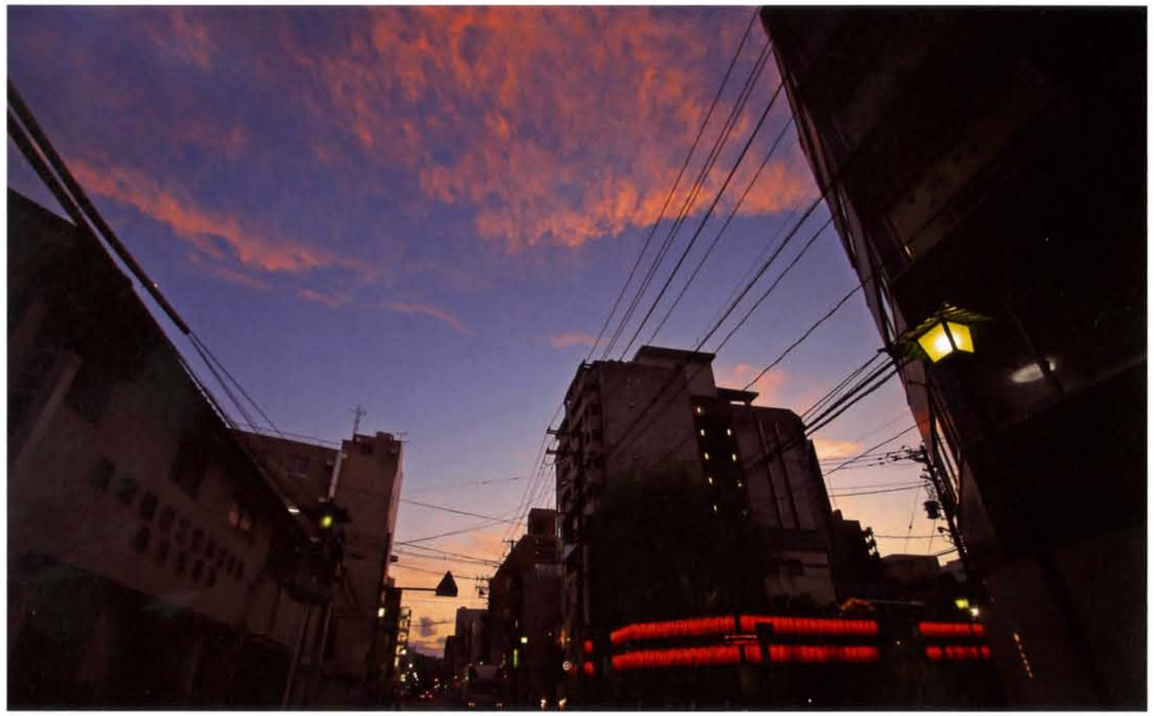
2016年9月3日発行(創刊2002年3月31日)

仙台文学館ニュース

第三十一号

Sendai Literature Museum News



柳町の大日堂

文学のある風景

ワンガマハシ

ワンガ　マハシテ　イツタツタ
ユウヤケ　マチハ　アカカツタ
ドコカノ　マチハ　トホカツタ

ワンガノ　カネガ　ナツタツタ
ワタシガ　トホノ　コロダツタ
ヒトリデ　マハシテ　イツタツタ

ワンガ　ガラ　ガラ　ナツタツタ
コドモハ　ユカレヌ　マチダツタ
トホサン　ビヤウキノトキダツタ

ワンガ　マワシテ　イツタツタ
ユウヤケ　マチハ　アカカツタ
ガンガラ　カネガ　ナツタツタ

（スズキヘキ「ワンガマハシ」）

＊後に「ワンガマワシテイツタコドモ」というタイトルに変えて親しまれている。

『ユキユキドンドン
―スズキヘキ詩集―』
（2016　仙台文学館）

小池　光の 気になる日本語 20

けじめ

世の中の責任ある人がよからぬことをすると、「けじめ」という言葉が氾濫する。このたびの東京都知事の不祥事問題などはその典型だ。けじめをつけろ、けじめがついてない、けじめはどうするんだ、それでけじめをつけたつもりか、等など一斉に人々が、マスコミがこの言葉を使いだす。

なんとなく不思議な日本語のような気がして、大きな辞書を引いてみた。

「物事の差。二つ以上のものの間にある質的または量的な差」「連続したものが変化したときに認められる、前と後との質的な違い」「二つ以上の物事について、内容、外観などによって区別をつけること」などと書いてあってわかるようでわからない。ただ「守るべき規範や道徳などにより、行動や態度につける区別」とも出ていて、政治家に求められる「けじめ」は、この場合に当てはまる。

さらに調べて行くと「けじめ」は古い日本語で、すでに源氏物語などにもいくつも用例があるようである。千年前から使われていることばなのだ。「上達部、みな、乱れて舞ひ給へど、夜に入りては、ことにけぢめも見えず」（「花宴」）。谷崎潤一郎の現代語訳を開くとこのくだりは「それから後は上達部が皆々次第もなく舞われましたけれども、夜になっては特にいずれがいずれとも区別がつきません」となっており、「けじめ（けぢめ）」が「区別」と訳されているのがわかる。「上達部」は「かんだちめ」と読み、位の高い公家のこと。

「うち継ぎて、世の中のまつりごとなど、殊に変るけぢめもなかりけり」（「若菜下」）。このくだりは「引き続いて世の中の政などは格別変りもないのでした」と谷崎本。特に「けじめ（けぢめ）」は訳されていない。このように、そもそもは区別、違いをいう語で、政治家の責任などというニュアンスがもっぱら出てくるのは後代のようである。

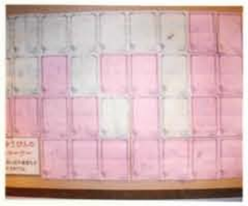
「けじめ」の「め」は、「分かれ目」「境目」の「め」であるような気がする。ではそれに冠された「けじ」とは何か。まったく見当がつかない。なんとも不思議な日本語だ。語源を追求して行くと、しばしばこういう場合にぶちあたる。言葉の成り立ちは結局のところ闇の中である。

それにしても「けじめ」という言葉が氾濫することのない世の中になってほしい。そう願うのはわたしだけではない筈。

日本古典文学大系14『源氏物語一』　岩波書店
日本古典文学大系16『源氏物語三』　岩波書店
谷崎潤一郎訳『新々訳源氏物語』巻二・巻六　中央公論社

学芸室日記

○4月23日（土）から6月26日（日）まで特別展「まど・みちおのうちゅう」を開催しました。まどさんといえば、「やぎさんゆうびん」ということで、展示室内に、「やぎさんゆうびん」ポストを設置しました。まどさんの詩への感想や想い出を書いて、こちらのポストに投函していただくというものでした。イラストが添えられたものや、用紙にびっしりと想いが綴られたものなど、大人から子どもまで300枚を超えるお手紙が寄せられました。会期中、展示室内にずらっと貼り出してご紹介しました。



○6月25日（土）、26日（日）の両日、仙台卸商センター産業見本市会館サンフェスタで、ミュージアムキッズ！全国フェアが開催されました。震災で被災した子どもたちを元気づけようと「こどもひかりプロジェクト」が企画したもので、北は北海道から南は沖縄まで、200館を超える博物館や美術館が集結し、子ども向けのワークショップを行いました。

仙台宮城ミュージアムアライアンス（SMMA）の一員として、当館も初めて参加し、「しおり」などを作るワークショップを行いました。休む間もなく、次から次へと子どもたちがやって来て、夢中になって楽しんでくれました。また日頃はなかなか出会えない、各地の学芸員の方とも話す機会もあり、充実した一日となりました。

○8月6日（土）にこまつ座第114回公演「紙屋町さくらホテル」を上演しました。この戯曲は広島に投下された原子爆弾により、メンバー全員が亡くなった、移動演劇隊「桜隊」の史実を踏まえながら、1997年の新国立劇場開場記念のために、井上ひさしが書き下ろしたものです。演劇人と演劇を愛した庶民の受難の歴史を、随所に笑いをちりばめながら書いた作品からは、井上ひさしの演劇への限りない愛が感じられます。奇しくも広島に原子爆弾が投下された8月6日が上演日となった今回、仙台では初公演ということもあり、お客様の関心も高く、チケットは完売。観劇後のアンケートには、作者がこの戯曲に込めた思いを受け止めた方々が、自らの中から溢れる気持ちを記して下さいました。仙台で多くの方々にご覧いただくことができて、私たちも感無量でした。

仙台文学館ニュース　第三十一号

仙台文学館 Sendai Literature Museum
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.sendai-lit.jp/

［表紙写真］佐々木隆二
［印刷］（株）ユーメディア
［挿画］古山 拓

再生紙使用 VEGETABLE OIL INK

シリーズ 私の一冊 第二十六回

『竜馬がゆく』（司馬遼太郎）

西巻 茅子

小学生、中学生の頃は、当時としては、よく本を読んだ子どもだったと思う。終戦の翌年が小学校入学だったので、子どもの本など何もなく、教科書でさえ上級生のお下り、いわゆる黒塗り教科書だった。私の家には、母が古本屋で買ってきた宮澤賢治の『風の又三郎』が一冊だけあった。三、四年生になると、二才年上の姉が借りて来る少女小説や、世界名作童話みたいな本は、押し入れに入ってよく読んでいたのを思い出す。その後、六年生位になると、母が友人と廻し読みをしていた大人の本、当時話題になっていた新刊本『チボー家の人々』やパールバックの『大地』、カミュの『異邦人』等、片っ端から読んでいた。分ろうが分るまいが、兎に角読んでしまうという読み方だった。小学生の頃は、好奇心がある割に余程退屈していたのだろう。

中学生になってからは、月に二百円のお小遣いを貰えるようになり、やっと自分の本を買えるようになった。山本有三とか、武者小路実篤とかいう人の本を幾冊か読んだけれど、私の心に深く残るという本を探しあてることは出来なかった。

大学生になった頃は、実存主義全盛の時代で、周りが読んでいるという理由で、サルトルやカミュもずい分読んだけれど、私の人生を大きく変えることはなかった。

四十才を過ぎた頃、その頃はほとんど本という物を読んでいなかった。幼い子どもが二人いて、絵本の仕事もしていたので、暇がなかったと云えば聞えはいいのだけれど、実は、夫が私が本を読む事を好きではなかったからだ。しかし、その彼がある日突然離婚話を切り出したのである。私としては彼の言う理由には全く納得がいかなかったのだけれど、一応彼の言い分だけは聞いて結論は保留ということにしておいた。三才と五才の子どもがあまりにも幼なすぎて、父親を突然失うというのは可愛そうに思ったからだ。

そんな訳で、私はその保留の間、夫は帰って来ないので、本が自由に読めるということに気がついた。子ども連れで遊びに行く家に沢山本があり、そこで借りた本が司馬遼太郎の『故郷忘じがたく候』であった。朝鮮から連れてこられた陶工の話で、久しぶりに本を読んだせいかとても面白くて、私の混乱していた頭を冷してくれるものであった。少なくとも、本を読んでいる間は、余計なことは考えなくてすむのだった。それがきっかけで、私は、自分でも司馬の本を次々に買うようになった。『坂の上の雲』『国盗り物語』『菜の花の沖』『竜馬がゆく』『峠』等々。

司馬の本は読みやすく、具体的な事柄でストーリーを語っていく。又、長編が多く、読んでも読んでもなかなか終らない。考えても仕方ない事を考えなくてすむ様に司馬の本にのめり込んでいったのかも知れない。

私が一番気に入ったのは、『竜馬がゆく』の坂本竜馬であった。こんなに素敵な男がいるなんて、と自分の平凡な夫にかかずらわっていることが、ばからしく思えてきた。竜馬は未来を行きていくことに勇気と希望をもって、混乱の世の中をゆうゆうと生きているのである。私も頑張って生きていけば、必ずいいことがある様に思えたのだ。『竜馬がゆく』は私の離婚を後押ししてくれた大切な一冊だったのである。

司馬遼太郎『竜馬がゆく』
文藝春秋　1963年～1966年

後に、『竜馬がゆく』はTVドラマにもなり、それを見ても本を読んだ時の様な感動は全く覚えなかった。やはり司馬遼太郎の書いたものは、心に深く入り込むものだったのである。

私は司馬から、歴史というものを学んだ。時代というもの、風土というものも学んだ。歴史の物語を楽しませてもらった。一人の人間の小さな力が大きな流れの中で流されながらも、その流れの方向をさし示してゆくということがあるという事も学んだ。

この原稿を書くにあたって、私は、本棚の奥から『竜馬がゆく』全五巻を出してきて、少しだけ読むつもりで、三十数年ぶりに読んでみた。やはり面白くて止められず、全五巻を三日で読んでしまった。もちろん忘れてしまっている細部は多かったけれど、竜馬という人が実にいき〳〵と生きている。

あれから歴史の本もずい分読むようになり、時代のことや、社会のこともずい分知ってきたのだけれど、この本を読んでいると、そういう私の知識等と関係なく、或は本を読んでいるのだという感覚を忘れさせてくれて、本の中に入り込んでしまうという面白さがある。物語り作者の筆の力というものであろう。彼は歴史上の出来事を書くに当って、その風土をよく知って、よく見て、当時の人の様に感じながら書いたのであろう。登場人物を隣に居る人の様に感じ、竜馬という男を愛を込めて書いたのであろう。

西巻茅子（にしまき かやこ）

1939年、東京都生まれ。東京芸術大学工芸科卒業。学生時代からリトグラフ、エッチングを手がけ、1966年、日本版画協会展新人賞を、翌年には同奨励賞を受賞。1967年『ボタンのくに』で絵本作家としてデビュー。以来、『ちいさなきいろいかさ』（もりひさし 文／第18回サンケイ児童出版文化賞）、『ふんふんなんだかいいにおい』、『あいうえおはよう』、『えのすきなねこさん』（第18回講談社出版文化賞絵本賞）、『もしもぼくのせいがのびたら』など、数多くの作品を手がけている。1969年に描かれた『わたしのワンピース』はこどもたちに愛され続けるロングセラーの絵本となっている。

撮影／黒澤義教

西巻さんの展示会をしました！！

17回目を数える「こども文学館えほんのひろば」。今年は、西巻茅子さんの原画をご紹介しました。

クレヨンで描かれた手書きのメッセージがお出迎え。

『わたしのワンピース』のラフスケッチ。当初は「ふしぎなワンピース」というタイトルでしたが、すでに私たちがよく知る絵本の原型が出来上がっていました。

作品は、油絵の具、ガッシュ、アクリルカラーなど、様々な画材で描かれたものをはじめ、刺繍やアップリケ、色紙を貼り付けたものなど、多岐に亘っていました。描くことの愉しさが伝わってくるものばかりでした。

『えのすきなねこさん』原画
（画材/ガッシュ）

「変身コーナー」では、西巻さん手描きのワンピースを着ることができました。絵本と同じ花や鳥が描かれていて、うさぎの帽子とともに大人気でした。

7月31日は、西巻先生の講演会にギャラリートーク、サイン会の三本立てと盛り沢山の一日でした。ギャラリートークは100人を超える人が集まり、展示室はギュウギュウ詰めでした。西巻先生、ありがとうございました。

特別展 にゃんてったって ～猫と人間の物語～

猫（ねこ）

2016年9月10日（土）～11月6日（日）

主催:仙台文学館　企画協力:株式会社クレヴィス
協力:仙台市動物管理センター（アニパル仙台）、「大きな青い馬」、「猫専門またたび堂」、佐藤浩康

明治以降近代になると、夏目漱石・内田百閒ら多くの作家が猫にインスピレーションを得、癒しやなぐさめを与えられてきました。

空前の猫ブームと言われる現代社会において、猫と人間はどんな関係にあるでしょうか。家族の一員として生きる猫がいる一方、飼い主のいない多くの猫がいのちを落としているのも事実です。

作家・写真家・愛猫家・行政獣医師といった様々な職業の人と猫との関係、そして、その中から生まれた作品をとおして、人間のあり方をかえりみるきっかけにしてくだされば幸いです。

猫は、千年以上前の平安時代から現代に至るまで、人間と深い関わりを持ちながら生きてきました。

平安時代の文学作品、『源氏物語』『枕草子』『小右記』には高貴な猫が登場します。

江戸時代の戯作者・滝沢馬琴は長寿の黒猫を飼い、浮世絵師・歌川国芳は、猫を懐に入れ、何頭もの猫と一緒に生活していました。

アニパル仙台から一般家庭に譲渡された「むぎ」▶

内田百閒著『ノラや』（1957年12月　文藝春秋新社）扉絵［夏目漱石筆鉛筆画　明治末年頃ノ写生］

1 講演会「動物を詠む、猫を詠む」

館長・小池光が、多くの歌人が詠んだ動物の短歌や、猫を詠んだ短歌について様々な面からお話をします。

日　時:9月22日（木・祝）13:30～14:30
定　員:80人
会　場:仙台文学館2階講習室

2 ワークショップ「羊毛フェルトでリアルな猫を作ろう!」

もわもわ＊ぴより制作▶

日　時:11月3日（木・祝）13:30～16:00
講　師:もわもわ＊ぴより（羊毛フェルト作家）
定　員:10人
会　場:仙台文学館2階講習室
材料費:1,000円
対　象:中学生以上
※❶、❷ともに、往復はがき1枚につき、1名の申込み。名前、住所、電話番号、イベント名を明記の上、仙台文学館へ。
◎申込締切:❶は9月13日（火）、❷は10月4日（火）［必着］

3 学芸員による展示解説

日　時:10月30日（日）13:30～14:30
※申込み不要、特別展観覧券をお求めの上、仙台文学館2階講習室へお集まり下さい。

猫を見守る大佛次郎 1954年（撮影:石井彰氏）

同時開催 岩合光昭ミニ写真展 ねこ

世界的に活躍する動物写真家・岩合光昭が宮城県石巻市の田代島で撮影した猫たちの生き生きとした写真を中心に集めた「岩合光昭ミニ写真展」を開催。現代の猫と人間との関係、猫が生きる姿を、写真を通してご覧ください。

I. 岩合光昭 〈アーティストトーク〉

日　時:9月27日（火）①〈午前の部〉11:00～11:30 ②〈午後の部〉14:00～14:30
定　員:各回150人
会　場:仙台文学館2階講習室
※往復はがき1枚につき、1名の申込み。名前、住所、電話番号、イベント名、①〈午前の部〉、②〈午後の部〉どちらを希望かを必ず明記の上、仙台文学館へ。なお、入場の際には、特別展観覧券の半券が必要です。
◎申込締切:9月14日（水）［必着］

II. 岩合光昭 〈サイン会〉

日　時:9月27日（火）①〈午前の部〉11:45～ ②〈午後の部〉14:45～
定　員:各回200人
会　場:仙台文学館2階講習室
※サインは、仙台文学館の販売コーナーで当日に購入した写真集・書籍（お1人2冊まで）に限ります。ご購入時、ご希望の方に、①〈午前の部〉、②〈午後の部〉の参加整理券をそれぞれ先着200人に配布します。

岩合光昭さんが来館します!

©Iwago photographic office

あなたの撮影した愛猫の写真を募集します!!

◎愛猫の写真と、【住所/氏名（ペンネーム）/電話番号/猫の名前/猫の年齢（月齢）/写真のエピソード（200字以内）】を明記した用紙を同封し、仙台文学館まで郵送ください。
◎写真の裏にも、【住所/氏名（ペンネーム）/電話番号/猫の名前】を明記してください。
◎写真は、ご自身で撮影したオリジナルな写真で、L判（89×127㎜）〈縦横は自由〉に限ります。
◎お送りいただいた写真は、返却いたしません。
◎応募締切:9月1日（木）［必着］

▲作家・小池真理子氏の愛猫「桃」

内田百閒著『ノラや』中扉（1957年12月　文藝春秋社）

▲展示室内イメージ図

▶飼い主のいない猫から家猫になった「チャ」君

「小さないのちを考える ～絵本朗読&映画上映&トークライブ」

人間と関わる「猫」、その「いのち」とどのように向き合うか、朗読・音楽・映画・トークを通して考えます。

日　時:9月30日（金）　17:30開場／18:00開演
会　場:せんだいメディアテーク　7階スタジオシアター
内　容:第一部　絵本『明日もいっしょにおきようね　捨て猫、でかおのはなし』
朗読&電子ピアノ演奏
出演:鈴木玉能（朗読）、半澤文恵（演奏）
第二部　映画『みんな生きている～飼い主のいない猫と暮らして～』上映
第三部　ゲストによるディスカッション
出演:泉悦子（映画監督）、穴澤賢（絵本原作者）、安倍淳子（「いのちのリレー」代表）、佐藤美紀（「愛すべき野良猫の会」代表）、亀田由香利（元・仙台市動物管理センター所長）
料　金:全席指定 1,800円（文学館友の会、事業団友の会会員は1,500円）
※未就学のお子様の入場はご遠慮ください。

絵本表紙（2012年4月　株式会社草思社）
絵:竹脇麻衣　文:穴澤賢

ライブ文学館 vol.16

新刊紹介
『ユキユキドンドン ～スズキヘキ詩集』

♫タ～ンポポ山で……♪♪

常設展示室で、スズキヘキのしみじみした歌声を一度はお聞きになったことがあるのではないでしょうか。このたび、ヘキの一〇〇〇を超える作品を四つの詩風に分け、代表する一〇五篇を選んだ『ユキユキドンドン スズキヘキ詩集』を、仙台文学館選書として刊行いたしました。

「タンポポヤマ」「ユキムシトテブクロ」などの童謡で知られるスズキヘキは、童謡というジャンルにとどまらない多くの詩篇を書き残しています。しかし、そのほとんどが活字化されておらず、また、没後まもなく刊行された『スズキヘキ童謡集』も、現在入手することは困難なため、ヘキの作品を手にとって読むことが難しい状況でした。

今回の詩集では、童謡のほか、暮らしに根ざした生活詩、現代詩など多様なヘキの作品をご紹介しています。

詩篇の他、コンサートでヘキの詩を愛唱している歌手のさとう宗幸さん、歌人の佐藤通雅さん、ヘキの詩に曲をつけた作曲家の岡崎光治さんにも心温まる文章をお寄せいただきました。巻末には、ヘキの御子息の鈴木楫吉氏・児童文化研究者の加藤理氏による解説と、詳細なヘキの年譜も収められています。一冊一〇八〇円（税込）で、仙台文学館でお求めいただけます。ぜひ手に取ってご覧下さい。

スズキヘキ（昭和40年代初頭）

お知らせ
仙台文学館に新しいカフェ「ひざしの杜」がオープンしました！

四月二十七日に、文学館内にカフェ「ひざしの杜」がオープンしました。

パンメニューとご飯メニューを選べるランチプレート、焼きたてピザ、定番のカレーライスなど、様々なメニューで皆様をお迎えします。食べごたえのある週替わりランチプレート（一〇〇〇円：税込）は、ドリンク付きです。また、サラダバー（四五〇円：税込※ランチプレートとセットの時は三〇〇円）は新鮮なお野菜がおいしいと評判です。

そして楽しみなのは、お食事ばかりではありません!!クロナッツやフォンダンショコラ等のデザート、ドーナッツドリッパーという珍しい抽出方法で淹れるこだわりのコーヒー等、喫茶メニューも充実しています。

夏休みの「西巻茅子の世界」展の会期中は、西巻さんの代表作『わたしのワンピース』をモチーフにしたデザートメニュー「アイス&ケーキのうさちゃんクレープ」をお出ししました。

今後の展示でも本の世界と一緒に楽しめるメニューが登場する予定です。どうぞお楽しみに！

西巻茅子の世界
特製スイーツ

生ハムとチーズの
フォカッチャ

おろしそハンバーグと
梅しらすごはん

これまで提供した
ランチメニューの一例です

皆様のご来店、
お待ちしています！

ライブ文学館 vol.17
「方言を味わう、方言から考える～『吉里吉里人』の世界」

東北の小さな町が、突然日本国からの分離独立を宣言し、「吉里吉里国」を打ち立てるという奇想天外な着想で描かれた井上ひさしの『吉里吉里人』は、ユーモアあふれる筆致で現代社会への問いを投げかけ、刊行から三十五年を経てなお古びない普遍性を持っています。この小さな国の独立の象徴が、「吉里吉里語」です。吉里吉里人にとって、自分たちの言葉はアイデンティティとして位置づけられています。

今回のライブ文学館は、この「吉里吉里語」の醍醐味を耳で味わいつつ、この作品が持つ今日的意味を改めて考える企画です。第一部の朗読は、以前開催した企画展「俺達の国語ば可愛がれ～井上ひさし「方言」へのまなざし」の「展示室劇場」で『吉里吉里人』第二章を熱演した、ウィリーささき。さん。今回はもっと広く、音響設備も整った会場で、再びあの「方言」のリーディングを存分に味わっていただきます。

吉里吉里語の朗読を堪能した後の第二部は、「方言」を吉里吉里人のアイデンティティに据えた井上ひさしのメッセージを、東北学の専門家・赤坂憲雄氏と、井上ひさしとも交友のあった近代文学研究者・小森陽一氏に読み解いていただきます。赤坂・小森両氏から、どんな刺激的なお話を伺うことができるか、今から楽しみです。皆様ぜひ会場へ!!

＊日時：十一月四日（金）
　十八時三〇分～
＊会場：宮城野区文化センター
　パトナシアター
＊料金：二三〇〇円
　（友の会会員は二〇〇〇円）
　※未就学児の入場は不可
＊前売り開始は九月十日～

ウィリーささき。氏

小森陽一氏

赤坂憲雄氏

お知らせ
せんだい文学マップリニューアル中です!!

仙台市内の文学の足跡を辿る「せんだい文学マップ」。最初に作成したのは、平成十四年でした。それから十四年、年ごとに変わる情報をその都度反映させながら、更新してきましたが、今回本格的にリニューアルをすることになりました。現在、職員が手分けをして各所に赴き、現状確認をしながら準備を進めています。また当館敷地内にある碑も新たにご紹介。基本の形は踏襲しつつ情報を新しくし、文学館HPにもデータをUPして、新たな発信をする予定です。今しばらくお待ちください。

せんだい文学マップ

エドマント・ブランテン詩碑

海鋒義美碑

扇畑忠雄歌碑

文学館の敷地内にある文学碑

仙台文学館の観覧料及び使用料の改定のお知らせ

仙台市において、市民利用施設使用料の見直しに係る条例が改正となりました。これにより10月1日から、仙台文学館の観覧料及び使用料も改定となります。詳しくは、当館のホームページの「ご利用案内」をご覧ください。